６　事例検討会の開催

状況によっては、担任一人では、解決の方策が見つけにくいことがあります。そのような場合、校内コーディネーターは、早期に様々な方法が検討されるように、事例検討会を実施します。事例検討会については、同学年の担任、校内委員会、地域コーディネーターの巡回訪問の活用、外部の関係機関や専門家の招へい等、段階に応じた開催が考えられます。

事例検討を行うことで、具体的な支援方策についての共通理解が進み、教職員一人ひとりの実践力や学校の組織的な課題解決力の向上につながります。

【事例検討会の目的】

・児童生徒の多面的な理解
・これまでの支援等についての評価、今後の支援の方針の決定

【校内コーディネーターの役割】

校内コーディネーターは、担任と連携協力し、次のことを行います。

・会議の参加者の決定
・会議の時間、進め方、記録方法の決定
・協議のまとめと「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」への反映

【事例検討会の協議手順】

①　事例提示（当該児童生徒の実態の共通理解）
　・学習面、心理・社会面、進路面、健康面についての「良いところ」「気になるところ」
　・現時点での目標、これまでの指導・支援の方針と具体的な対応
②　特徴的な行動の背景や指導・支援の検討
③　グループ協議
④　アイデア・意見の整理と指導・支援に向けての行動計画の作成
　・学習面、言語・運動面、心理・社会面、生活・進路面、健康面、保護者や関係機関との連携等について、「いつ」「誰が」「どのような支援を行うか」の決定

【事例検討会の協議上の留意点】

◆　児童生徒を理解するために
　・児童生徒の学習面や行動面について、簡単なレポートを作成する。
　・参加者は、事前に、確認したいこと、気になることなどをメモしておく。
　・好ましい結果に結びついた支援を参考に、協力できる事項を考える姿勢で参加する。
　・長所に焦点をあてた児童生徒理解を進める。
◆　指導方針の修正
　・児童生徒の示す困難等の要因や背景についての仮説を立て、指導・支援の見通しをもつ。
　・これまでの指導・支援を評価し、効果的なものになるよう改善を行う。

事例１　インシデント・プロセス法を活用した事例検討を行う。

＜インシデント・プロセス法とは＞

事例提供者からの短い象徴的な出来事（インシデント）に対して、参加者が質問することによって、事例の概要を明らかにしながら、問題の原因と具体的な対応を検討していく方法です。一つの事例を参加者が共有して考えることができるので、具体的な指導・支援を導き出すことに有効です。

＜インシデント・プロセス法の特徴＞

○　事前に詳しい資料を用意する必要がなく、事例提供者の負担を軽減できる。
○　参加者は事例提供者に質問しなければならないので、積極的な参加が期待できる。
○　問題解決の当事者の立場に立てるので、主体的な研修となる。
○　視点を絞りながら必要な情報を収集できるため、情報収集力を培うことができる。
○　事例検討会後の参加者の実践に結びつきやすい。

＜進め方の例＞６０分

①　事例提供者が事例を発表する（５分）。
②　参加者が質問する（事例の背景の明確化）（２０分）。
③　指導や支援を考え、提案する（グループ協議）（３０分）。
④　指導や支援をまとめる（５分）。
　・当面の指導や支援について（事例提供者より）
　・今後の指導や支援について（指導助言者より）

①　事例提供

事例提供者

・友達との人間関係に困難を示す児童への指導・支援について相談します。
・Ａ子さんは、班での活動や集団での遊びが苦手で、友達との会話がかみ合わず、少しのことで感情的になってしまうことが多く、友達と楽しく活動することが難しい状況です。本人は友達と一緒に活動したい気持ちはあるのですが、好きなことに熱中して、気が向かない課題には取り組もうとしなかったり、授業中にイライラしてしまうことが多かったりするため、そのことを責められることがよくあります。

②　質問

進行
（ルールの確認）

・これから、参加者全員に順番に事例について、質問してもらいます。
・質問は、一人２回です。全員が２順したら終了です。
・必ず、何かを質問してください。
・質問は一問一答形式で具体的な内容を聞くようにしてください。
・事例の事実について質問・回答してください。
・事例提供者の推測、感想、意見を求めないようにしてください。
・事例提供者を責めるような質問はしないようにしてください。
・事例提供者は、憶測や意見は、原則として言わないようにします。ただし、推測で答えなければならないときは、その根拠となる事実や理由を簡単に説明してください。また、質疑では、今後の対応も言わないようにします。

質疑

参加者Ａ

Ｑ．授業中のイライラとは、どのような状態ですか？

事例提供者

Ａ．友達に対し、自分の思いがうまく伝えられず、乱暴な口調になります。

参加者Ｂ

Ｑ．授業中の先生の質問には、答えられますか？

事例提供者

Ａ．算数等の答えが、わかっている質問には答えますが、国語等の感想や心情等の抽象的な質問には答えられないことが多いです。

③　指導や支援の検討と提案

進行
（ルールの確認）

・グループで協議して事例に対する支援策について考えてください。
・協議時間は、２０分です。
・協議では、「自分ならこうする」と提案してください。なぜ、そうするのかという根拠や理由も併せて発表してください。
・協議後は、１グループずつ、支援策について報告してもらいます。

グループ協議

参加者Ａ

自分なら、グループ活動を仕組む際には、何をどのような順番で行うのかを視覚的に提示してみます。

参加者Ｂ

私ならＳＳＴ（ソーシャル・スキル・トレーニング）を行います。友達の誘い方、断り方、わからない時の質問の仕方、手助けを求める言い方など、事前の個別指導を計画的に行います。

ｸﾞﾙｰﾌﾟ発表

私たちのグループでは、児童の困難の要因を～と考え、三つの支援策を考えました。①～、②～、③～。当面、問題の場面では、①のように支援しながら、②の指導を計画的に進めていきます。

④　指導や支援をまとめる

事例提供者

問題に対するこれまでの自分の対応を振り返り、今後の方針についてまとめる。

指導助言者

・事例検討全体を振り返って、この事例のポイントをまとめる。
・事例から、すぐに行える指導・支援の方法等についてまとめる。

＜グループ協議＞

・グループ協議の場面では、課題のカテゴリー化、解決すべき問題の優先順位、支援策の実現可能性を踏まえ支援策をまとめることもできます。

＜記録用紙の例＞

事例	友達との人間関係のつまずき、集団活動が苦手、会話がかみ合わず感情的、気が向かない課題には取り組もうとしない、授業中にイライラし責められる

1　出来事の背景となっている事実を集め、まとめましょう。

Q質問	A回答
・授業中のイライラの状態は？	・自分の思いがうまく伝えられず、乱暴な口調

2　早急に解決すべき、一番の問題点をしぼり込みましょう。

緊急度 深刻度	問題点	カテゴリー
1	・友達から責められ、ストレスがたまる。	自己肯定感の低下
2	・集団活動や友達との付き合い方が苦手	ｿｰｼｬﾙ・ｽｷﾙの不足

3　一番の問題点について、具体的支援策を考えましょう。

問題点		
高 ←	支援の現実可能性	→ 低
・ほめる	・ＳＳＴの指導	
緊急度 深刻度 ・活動手順の視覚的支援		
低		

・事例検討会の終了後、参加者が記入した記録用紙を集め、事例提供者に渡し、今後の支援の参考にすることもできます。

・校内コーディネーターが、参加者の記録用紙をまとめて、校内ＬＡＮにアップロードするなどして、情報の蓄積と共有を図ることも考えられます。

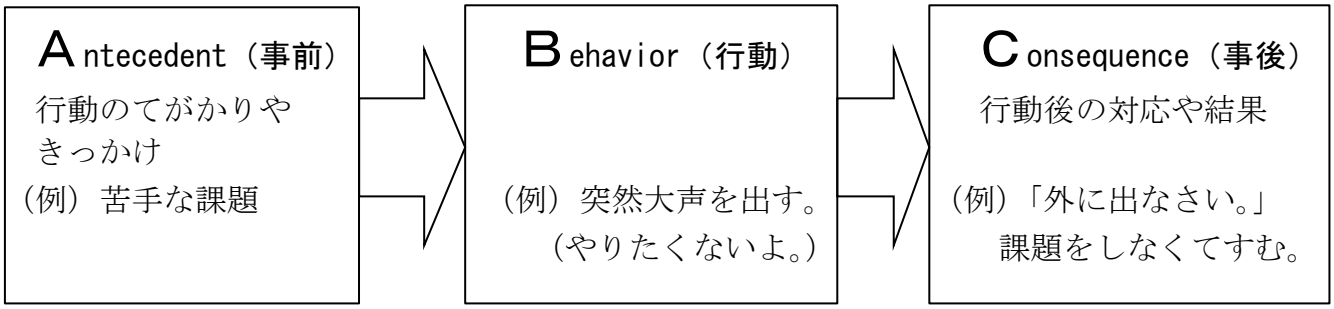
事例２　ストラテジーシートを活用したＡＢＣ分析による事例検討を行う。

※　ストラテジーとは、日本語に訳すると「方略」という意味で、教育の場で使用する場合は、成果を上げるための方法と捉えることができる。

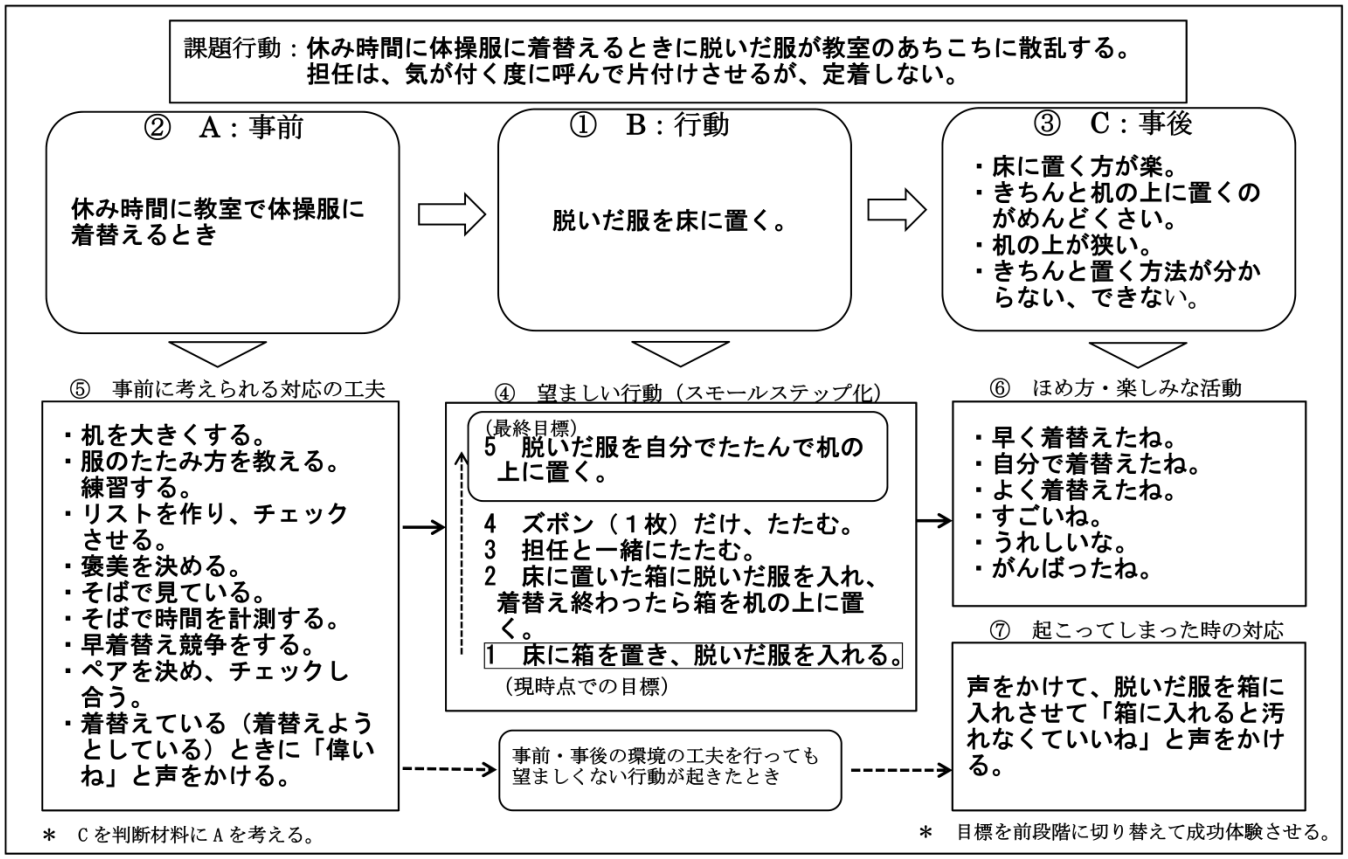
＜ＡＢＣ分析とは？＞

応用行動分析学における「行動を理解する」ための枠組です。子どもの行動は、子どもの置かれている環境との相互作用により生じます。子どもの行動の変容を促すには、行動の前後に起こっている出来事を整理し、行動をコントロールする「個人」と「環境」に対する双方向的なアプローチが必要とります。

子どもの行動について「なぜ？」「どうして？」と感じたときに、前後の出来事から行動の意味を読みとる方法をＡＢＣ分析といいます。



ストラテジーシートを使った指導・支援の考え方（流れ）



ストラテジーシートの記入と問題行動への対応の考え方

ストラテジーシートの記入は、①Ｂ行動→②Ａ事前→③Ｃ事後の順に記入します。「Ｃ:事後」に記入する内容には、正解はありません。子どもの行動事実から、行動の意味（注目・要求・回避など）を推測することになります。

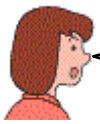
「Ａ:事前」「Ｂ:行動」「Ｃ:事後」の記入ができたら、第二段階として、具体的な対応を考えていきます。ストラテジーシートの「④望ましい行動」「⑤事前に考えられる対応の工夫」「⑥ほめ方・楽しみな活動」「⑦起こってしまった時の対応」について、それぞれ検討し、記入していきます。

「③Ｃ:事後」を判断材料に「⑤事前に考えられる対応の工夫」を考えていきます。

「⑤事前に考えられる対応の工夫」を考える際は、とにかくたくさんのアイデアを挙げることが大切になります。関係者が集まって知恵を出し合うブレインストーミングです。アイデアについては、事例検討会の場では実行可能かどうかは吟味しません。出されたアイデアについて一つひとつ、吟味を加えることは、逆にアイデアを出しにくくし、事例検討が行き詰まってしまいます。アイデアの実行可能性については、事例検討会後に指導者が吟味を加えながら可能性の高いものから実行に移していきます。

「④望ましい行動」は、スモールステップ化して考えることが大切です。最終目標を考え、最終目標に至るまでの行動をいくつかの段階に分けて子どもの行動を設定します。最初は、援助を受けながらの行動からはじめて、援助を少しずつ減らすことで最終目標に近づけます。ステップの要素としては、課題の時間、量やレベル、援助等を変数として変えていきます。

「④望ましい行動」は、目標とする行動でもあります。一度に多くのことを求めず、子どもが今の力でできる分かりやすい行動を設定することが大切です。



子どもの行動に対する結果として「⑥ほめ方・楽しみな活動」をたくさん用意しておきます。成功体験を強化することで望ましい行動も増えていきます。

事前の対応の工夫をし、望ましい行動をスモールステップで設定してもなお、望ましくない行動が「⑦起こってしまった時の対応」の基本原則は、前段階の目標に切り替えて、成功体験させるということです。感情的に叱るだけではなく、どう行動したらよいかを具体的に教え、援助つきでもよいので少しだけでも実行させてほめる（成功体験で終える）ことです。